

第2回滝山祭創立者講演「スコラ哲学と現代文明」を読む

森 幸 雄

1. はじめに

センター員の森でございます。今日はよろしくお願いいたします。

今回の講演会は、学内の掲示板などにも案内が出ました。このため、講演内容についてどこかに相談したり、大学の許可を得ておこなっていると考える方もいらっしゃるかもしれません。しかしこれは、創立者の講演を読んで私が感じたことを話すというものです。題材がキリスト教をベースとしたスコラ哲学の話ですので宗教についても話しますが、これも同様に個人的な見解であることをご了承ください。

私が「スコラ哲学と現代文明」の講演を聞いたのは高校生の時でした。創価高校の3年生で、講演会場の中央体育館で聞きました。創価大学では、池田講堂ができるまでは、中央体育館で入学式や卒業式をおこなっていました。この講演も中央体育館でした。私は多分、演壇に向かって右の後ろの2階で聞いていたと思います。

現在の創立者のスピーチですと、「(笑い)」という文字が入るように、緊張をほぐすためでしょうか、ユーモアをまじえてお話しになりますが、この講演をみればわかるように、どこにも「(笑い)」はありません。はじめから一気に本論を展開されています。しかも、事前に講演についての予備知識がなく、講演のなかでいくつか、人名とか固有名詞がわかる程度でした。ところが、1階で聞いていた創大生の気配が伝わってきました。厳肅な雰囲気とともに、私はわかっていくぞという空気も漂ってきました。スコラ哲学という難しい内容なのに、それを聞いてわかってしまう1・2・3期生はすごいと思いました。それが1・2・3期生を尊敬する理由のひとつにもなりました。のちに、この講演を聞いてわかりましたかと先輩にきいてみたい衝動に駆られました。答えを聞くのが怖いので、いまだ、聞いておりません。

2. 「講演を読む」の基本的立場

「スコラ哲学と現代文明」の講演はスコラ哲学に触れられている部分がかなりあります。ただ、私は専門家ではないので、スコラ哲学自体についての論考は専門家の方をお願いし、ここでは、スコラ哲学を通して語られた創価大学が果たすべき使命について建学の三指針を手がかりにしながら、述べさせていただきます。

第1には、スコラ哲学が、結果としてヨーロッパ文明、そしてその延長線上にある近代文明に果たした役割に注目したいと思います。スコラ哲学が近代文明に果たした役割を考えることは、創価大学が新しい文化の起源として担うべき役割の示唆になると思うからです。ですから、スコラ哲学そのものの発展についてではなく、未来の新しい文化を示唆するものとして、講演を読んでいきたいと思います。

第2には、この講演がおこなわれてから30年間にわたる、創立者の提言や行動、時代状況な

どを視野にいれて、講演を読むことです。講演の時点ではわからなかったことが、その後の創立者の行動を通して、その意味がわかるようになったことが多くあるからです。

第3には、この講演を、建学の三指針をより具体的に述べられたものとして読んでいきたいということです。前回の講演会で、杉山由紀男・副センター長は第3回入学式の講演について、「これは建学の三指針を具体的に述べられたもの」といわれていましたが、「スコラ哲学と現代文明」という講演も、同様に建学の三指針をより具体的に展開されたものと思います。

三指針を手がかりにすると、講演の内容もまた、3つの部分に分かれてくると思います。

はじめの部分では、近代文明の起源をスコラ哲学に置くという視点から、新しい文明の起点となるべき創価大学の位置付け、ならびに持つべき哲学について論じられています。建学の三指針の2つ目の「新しき大文化建設の揺籃たれ」についてスコラ哲学を通して話してくださっているのではないかと思います。

次の部分は、スコラ哲学が同時代の人にとって、重要な生きる指針を与えていたというところで、同時代に果たした役割という意味で建学の三指針の3つ目の「人類の平和を守るフォートレスたれ」について述べられていると思います。

最後の部分には具体的な「人間教育の最高学府」についての話があります。創立者が第4回入学式で大学のことについて講演されていますので、より具体的なことは次回の講演会であつかうところかと思います。

3. 近代の起点としてのスコラ哲学

創立者のスコラ哲学の位置付けは、現在の歴史の一般的な見方と比べて、ユニークかつ新しい見方であるという印象をもちます。通常の歴史の見方では、スコラ哲学とその前の時代の教父哲学とともに中世の時代に位置し、スコラ哲学を批判した新しい思想哲学が生まれることで、近代が始まるとされています。スコラ哲学が終ってから近代が始まる、この意味ではスコラ哲学の時代は現代とは無縁な時代です。ところが、教父哲学からスコラ哲学へと変わるその時代に大きな境目を置き、スコラ哲学を起源として近代文明があるという視点で、創立者は話をされています。これは、創立者の視点からみたスコラ哲学の位置付けになっています。

その意味では長い文明論的な歴史の話になっています。この長い歴史の部分が「新しき大文化建設の揺籃たれ」ということにかかわる話ではないか、と思います。

2001年の創価学会の会合で次のような構想が発表されました。これからの長きにわたる創価学会の展望であり、50年ずつの時期に分けた発展構想です。

- ① 第1の「7つの鐘」 1930年から1979年
——「創価学会が大発展した時代」
- ② 第2の「7つの鐘」 2001年から2050年
——アジアをはじめ世界の平和の基盤をつくってまいりたい
- ③ 第3の「7つの鐘」 2051年から2100年
——『生命の尊厳』の哲学を時代精神にし、世界精神へと定着させたい
- ④ 第4の「7つの鐘」 2101年から2150年
——世界の『恒久の平和』の崩れざる基盤をつくりたい
- ⑤ 第5の「7つの鐘」 2151年から2200年
——第4の「7つの鐘」の基盤のうえに、絢爛たる人間文化の花が開いていくであろう

⑥ 第6の「7つの鐘」 2201年から2250年

⑦ 第7の「7つの鐘」 2251年から2300年

——第5の「7つの鐘」が実現すれば、第6の『7つの鐘』、第7の『7つの鐘』と
進みゆく

以上のように300年にもおよぶ長い期間を考えた構想ですが、スコラ哲学から始まる近代文明の歴史が700年から800年ですから、創価大学が揺籃となるべき大文化もそうしたスケールで考えるべきであると気付くべきでした。

20世紀生まれの私にとって、未来は21世紀という感覚でした。ですから新しい時代も21世紀であろう、という認識でした。「新しい大文化」というのも、子供か孫の世代であると思っていたのです。

この第7の鐘の時代の24世紀は、創大でいいますと、330期生が入学してくる時代の話です。創立者は、200期生、300期生といった時代まで視野にいれられている。逆にいいますと「大文化建設の揺籃たれ」の大文化は、200期生、300期生が担うものも含んだ話であったことに気付きました。ですから、近代文明もスコラ哲学を起源として考えていたという視点で読み直してみますと、確かに長い時間のなかで考えられていたことがわかります。

こうした視点から読み返してみると、1969年に建学の三指針が発表された際の講演でも次のように述べられています。

「すでに私どもは、芸術祭や文化祭等を通して、第三文明の萌芽ともいべきものを世に示してまいりました。だが、まだこれらはほんの序文にすぎない。真実の第三文明の興隆は、創価大学に学び、創価大学より巣立った、未来の人材によってなされることを断言しておきたいのであります」(p. 32)

第三文明という言葉は、創価大学のできる前から、創価大学の母体である創価学会でいわれていた言葉です。いつになったら第三文明ができるのか、21世紀になったらできるのかなと思っていました。自分のまわりを見渡し、はたしてこんなメンバーで担われる第三文明は大丈夫かなと心配してしまいましたが、200期生、300期生という時代になれば、いろいろな人材が育つでしょうから、期待できるかと安心しました。講演を聞いていたときには、「歴史的な」とか「新時代の」という言葉は耳に入っていたのですが、イメージがたいへん近視眼的なものでした。しかし、やはり700年たつて20世紀に終焉をむかえた文明の起源を振り返るとき、私たちが創価大学で担うべき文明も長い期間をかけてつくられるべきものという気持ちになります。

4. 教父哲学からスコラ哲学へ

宗教的なところに話を戻してみます。中世の教父哲学からスコラ哲学へと変わるといっても、教父哲学の時代は8世紀から10世紀ぐらいまで、スコラ哲学は11世紀から13世紀ぐらいの期間を持つものですから、長い歴史のなかで複雑なものになります。その長い歴史の中から、創立者は、両者の違いについて教会つまり宗教との関係で次のようにまとめられています。

教父哲学もスコラ哲学も、どちらもキリスト教の信仰の絶対性を基盤としています。その意味では両者は近代ではなくて、中世の哲学であるといえます。しかしながら、スコラ哲学の代表的な人物であるトマス・アクィナスやドゥンス・スコトゥスという当時の哲学者の論考を通して、信仰と理性との葛藤、あるいは分離という近代の問題がスコラ哲学のなかで取り上げられていることに注目しています。

教父哲学の時代は、理性は信仰に従属するものであり、理性が信仰を疑ったりすることは認

められません。信仰の側、つまりローマ教会に従うべきなんだという、あるいは従うのだという時代の哲学が教父哲学です。ところがスコラ哲学の時代に入ると様相が違ってきます。トマス・アクィナスにおいては、神学つまりキリスト教の信仰の中に理性がはいってくるようになります。神学は理性が一致する範囲において一致するが、信仰には理性によって認識できないものがあるととらえています。理性と信仰の分離について論究しています。時代が進んでドゥンス・スコトゥスになると、神の意志は何ものにも拘束されないもの、理性以上のものであるから、理性によって認識し基礎づけることはできないとしています。信仰と理性は基本的に分離するということとらえ方によって変わっています。ここまで言ってしまうと近代の考えになりますから、そうまでは言っていないようですが、創立者はそういう方向を読みとられたと思います。

信仰と理性、もっと正確に言いますと教会と理性が離れるきっかけを、スコラ哲学に感じているようです。理性が神学（教会）の下僕から離れる、理性でものを考えるようになる時代が始まるととらえられていると思います。スコラ哲学がそこに位置付けられています。

創立者の講演後の30年間と重ねて考えると、スコラ哲学のこの位置付けの持つ重要性が目立ちます。こんな話は講義ではしませんが、創価教育研究センター主催の講演会ですので考えを述べたいと思います。講演時点では、創立者は、同時に創価学会の会長でした。当時の創価学会は日蓮正宗の教義の下にある信徒の団体という性格も持っていました。このあと、ご存じのように宗門つまり日蓮正宗から創価学会がはっきり離れました。このことは宗教団体の内部の意見の対立があり分裂したにすぎないとの見方もあるでしょう。しかし、真理の強要であった教父哲学からの解放によりスコラ哲学が成立し、近代の起源となったとの講演と関連付けると、「スコラ哲学」の位置付けは講演当時よりも大きな意味を持つてくると思います。

講演後のこの出来事は、理性が神の下僕、真理の下僕から離れたということです。ちょうどスコラ哲学が近代文明の起源になったように、何百年後かに歴史を振り返ってみると、新しい文化の起点となったと言えるのではないかと思います。しかしながら、理性による批判を認めるということは、現代文明が陥っているのと同じような状況に新しい文化も陥るのではないかと心配もできます。理性の暴走が始まったという経験を繰り返すのではないかという懸念も生じます。

この点につきましては、講演のなかの普遍論争のところにこのようにあります。キリスト教が理性と真理を分離した後に、絶対者を認めるか認めないかというところに議論が集約されていきます。キリスト教における普遍論争とよばれるもので実念論（実在論）と唯名論の対立でした。最終的には、14世紀に唯名論が論争に勝利したため、人格神としての神から、理神つまり真理を神とするようになりました。さらには汎神から無神へといった哲学も生まれます。

ところが、仏法においては因果の考え方が、キリスト教のように一因ではなく二因であり、絶対者を必要としない、神なき宗教であり、ヨーロッパ人には想像できない宗教であるといわれています。しかも、仏法においては理性によって宗教を説明することができるとはいわれていますが、スコラ哲学とは違ったかたちで可能なのではないかといわれていると思います。宗教的な権威から離れたあとにスコラ哲学が歩んできた道は絶対者である神を否定してしまい、宗教的なものがすべて無くなってしまっていて、800年後のこの状況が生じました。しかし、創立者が信仰されている仏法はそんなことはないという確信があるわけです。

スコラ哲学ではなく、創価大学も研鑽すべき哲学をもつということは、現代文明がたどった歴史とは違う、それを乗り越えた新しい可能性があるんだとの指摘であると思うわけです。そういう確信のもとで、創立者にとってのスコラ哲学というものを考えてみますと、この30年間

で創価学会が日蓮正宗創価学会から創価学会、SGIインターナショナルとなっていく過程で、この講演の持つ意味はさらに別なかたちで注目されるべきものと思います。逆にいいますと、その流れを知った上で考えますと、創立者の宣言となった講演であるということを強く感じます。

創立者は初期の大学での講演のなかで、仏法と仏教という表現をされます。仏教という言い方は一般的な歴史的仏教思想ですが、仏法という時は、仏教一般ではなくご自身が信仰されている信仰を意味している点は重要です。

近代の始まりとしてのスコラ哲学という視点からみると2つの注目点があります。ひとつは非常に長い歴史の中で創価大学を位置付けている点。もうひとつは同時に新しい時代のスコラ哲学として始まるもの、また、始めるものを、創立者はすでに始められていたということでもあります。

5. 民衆全体の心に支えられたもの

こうした点は、スコラ哲学の同時代の文化についての指摘から読みとることができます。「今日もなお、ヨーロッパの諸都市の象徴としてそびえたっている由緒ある教会、寺院のほとんどは、このスコラ哲学の時代に建設、あるいは着工されている。パリの有名な建築物のなかで、「ルーブル宮、凱旋門、エッフェル塔などは王侯・特権者の栄華の残滓でしかありません。民衆全体の心に支えられた文化的な結晶という視点からすると、ノートルダムにはるかに及ばないと言わざるを得ません」(p.75)といわれています。ここでノートルダム寺院を高く評価されているのは、民衆全体の心に支えられた文化的な結晶であるという点です。当時の創立者を取り巻く状況のなかで、キリスト教の教会を評価することはたいへん思い切った発言であると思います。

「民衆全体の心に支えられた」という点に注目すると、民衆全体の心が建物としてあらわれたものが教会であり、哲学としてあらわれたものがスコラ哲学であり、大学という施設であるといえます。

創価大学を考える時にも同じことがいえると思います。民衆の心に支えられ、民衆の心の盛り上がりがあったということを理解して、初めて創価大学の位置付けが明確になります。創価大学ができたときには、創価大学をつくるにいたった民衆の心の高まりがあり、民衆の支えがあったことになります。前回の杉山副センター長の講演での大学史観ともいうべき、大学が大事なんだという創立者の話の背後にあるものを忘れてはならないと思います。「大学をつくれば新しい時代になるんだ」というのではなく、民衆の盛り上がりがあって初めて大学の意味ができる。創価大学は単にひとつの大学なのではなく、設立にいたった民衆全体の盛り上がりを考えなくてはならないと思います。創立者のこの講演には「人々」や「民衆」という言葉が、たくさん出てきます。創価大学が単に大学としてあるのではなく、多くの人々のなかに存在する、多くの人々も創価大学の一員であることをこの講演でいわれていることの意味を重く受けとめたいと思います。

6. 理性と信仰との打ちあい

スコラ哲学に始まる現代文明の終焉という指摘は、当時社会問題となっていた公害などのいろいろな問題から、この講演を聞いたときにも確かにそうであると感じていました。しかしながら、当時の私は心の荒廃については、あまり強く感じていませんでした。この講演以降、1990

年代になって、オウム真理教などの問題が現れてから、文明の終焉ということを強く感じ始めました。それはこんな考え方が生まれたことでした。信仰心から人を殺してしまう。人を殺せば殺すほど、自分たちの宗教的な地位が上がる。宗教的な良い位置に行くことができる。高い宗教的な力を持つ人間に殺されれば、殺された人間も幸せになれるという。信仰と理性が分離して、理性によって神は実証できないから、超能力や神秘的な力とかいうものについて、批判もしないで受け入れてしまう。その行き着く先にあったのがオウム事件だと思います。信仰を理性によってとらえることを放棄してしまうという信仰のありかたに行き着いてしまった。昔から、超能力や神秘的な力に魅かれることはありました。しかしながら、オウム事件では、ある意味でもっとも高い理性の教育を受けた人が、いとも簡単に流されてしまった。人を殺すのは悪いという、普通感覚を持てなくなってしまう。

これは、信仰という形で与えられたものには無条件に従ってしまい、それを批判的に受けとってはならないという前提があるからだといえます。この結果、非常に墮落した宗教の出現を許すことになるし、批判的に宗教をとらえることをしないのは理性の怠慢といわざるを得ません。

創価大学でも、理性的な批判が非難として受けとられ冷たい目で見られてしまうと思う学生の方もいるかもしれません。しかしながら、この講演の前年の1972年の第1回滝山祭で、創立者は次のようにいわれています。

「そこで私が申しあげたいのは、創価大学に対しても、創立者に対しても、批判をしてはいけないということ一つありません。いくらでも批判してけっこうです。また、私はご存じのように創価学会の会長であります。創価学会に対しても、信仰についてもいくらでも批判しても結構です。大学としても、学会としても、また私としても、反省すべきことは反省しなくてはならないし、改めるべき点はいさぎよく改めねばならない。諸君が創価大学に学んでいるのだから大学のことをはじめ、すべてに対して厳しい発言ができないなどという考えは、誤りである。皆さんが真剣に物事を思索し、言いたいことがあれば、何を言ってもよいし、いかなることを論じてもよい」(p.42)

理性で批判して結構だ、あるいは批判して欲しいという、自らの信仰に対する強い確信を感じます。キリスト教では神を理性で考えることは無理であるとなっていました。創立者の信仰にはそうしたことはないという、確信のあらわれとみることができると思います。

もちろん、批判したことに対しては反論がありうるし、批判したことがそのまま通るということではありません。批判に対して、互いに意見を述べあうというキャッチボールがあることが前提です。じっさいには、信仰と理性がギリギリと音をたててぶつかり合う状況のなかで、信仰も理性も深めていくという前提での新しい文化を生む揺籃である、ということではないかと感じました。

こうした、講演後の30年間の創立者の行動を考えますと、この講演は単にスコラ哲学という歴史上の事実について述べられているのではなく、創価大学が果たすべき未来についての話がありました。講演後の30年のうちに、われわれの目の前で創立者が行動を通して明示されていると思います。

7. 同時代人に果たした役割と「平和を守るフォートレス」

新しい大文化は300期生に任せるとなると、4期生の私には296年間はのんびりできるわけです。そんなに長く生きられませんから、ずーとのんびりしていいのかというと、そうでは

ないようです。同時代人への働きかけもスコラ哲学の重要な役割であったという箇所につづかれます。

スコラ哲学は、同時代人への生きる指針を与えた、これが教養なのであるといわれています。講演を聞いた当時は、「教養」や「生き方」を学ぶとは何だろうと考えても皆目わかりませんでした。そのうち、創立者の生き方をみれば、そうしたことがわかるかもしれないと思うようになりました。創立者が人と会われるときにどのようなことをいわれているのかを思い返してみました。創立者が対談される人には考え方の違う人もいます。しかし、そうした人と対談された時も平和を守るという点で一致していました。あるいは平和を築くためにどうしたらよいか、という対談でした。創立者の生き方・行動を通してみますと、現代において同時代人への生きる指針というのは「平和」を守ることではないか。建学の三指針の「平和を守るフォートレス」ということではないでしょうか。同時代への働きかけということがこの指針につながると思いました。

平和を守るとはどのようなことでしょうか。滝山城が近くにあったせいでしょうか、平和のために闘うということは、平和が侵犯されたときに、自分たちが攻められたときに、打ち返すという感じをもっていました。しかし、創立者の対談を読みますと、平和を守るとは戦争を生むようなさまざまな要因と闘う、あるいは平和を損なうような動きに対して闘うことのように思いました。南アフリカのマンデラ元大統領とかアメリカのローザ・パークスなどのように差別と闘うことも、平和のために闘うことです。ですから、外敵が攻めてきたときに創価大学を城にして闘うのではなく、ある意味では闘うという言葉があたらないような、たとえば人間をどこまでも大事にするという行動に我が身を賭けていくこと、こうした生き方を学ぶということになると思います。

「武田節」という唄のなかの「人は石垣、人は城」という言葉に対して、幼少のころ、人間が組体操の人間ピラミッドをつくって城を守っているイメージがありました。ある意味ではこのイメージのように、フォートレスということばにある城とは、「人」なのかなと思います。創価大学で学んだ人だけがわかる言葉ではなく、平和のために、あるいは人間の尊厳というような、世界中の人にわかるような言葉で語れる生き方・考え方を学び、実行していくところに、同時代の教養、あるいはフォートレスたれということがあると思います。

8. 人間と人間の集いとしての創価大学

創価大学では何をするのかということについて、要約すれば新しい人間復興の哲学を探求し、真実の教養を実践するといわれています。さらに第4回入学式講演における創価大学の使命というところで、もっと詳しく展開されていると思います。

創立者は創価大学を新しい文化の起点であると位置付けられている。これはなにも、創価大学という施設や学生だけではなく、もっと幅広いものをイメージされていると思います。「新しい時代の開幕のためには、新しい大学が必要でありましょう。否、大学という『形』は副次的なものかもしれない。この哲学を探究し、教養を実践する人間と人間との集いが、真の意味での大学を形成するのであります。大学をつくるものは、建物や施設ではなく、人間であり、理念なのであります」(p. 81)とあります。

現在、多くの卒業生の方が大学に来て、学生と会ったり、話をしてくれたりします。創価大学は、さまざまな方によって成り立っている。大学のスタッフでは不十分なところを補ってもらっているのではなく、まさにそうした人々によって創価大学は新しい大学でありうるという

意義付けがあります。新しい人間復興の哲学を探究し、真実の教養を実践する、そういう人々が集いあって大学をつくる。それがさらに、新しい文化の揺籃となり、同時代の平和を守るフオートレスになっていきます。とすると、教員だけでなく、さまざまな世界の方と接していくことも、創立者の構想にある創価大学なのかなと思います。

私はジャーナリズム・センターというジャーナリストを志望する学生と勉強するセッションを担当しています。そこで卒業生のジャーナリストに会うと、じつにさまざまな人がいることがわかります。こちらがジャーナリズムの現場について予想することとは全く違う話をしてくれます。これは学生にとってたいへん貴重な経験ですし、同時に卒業生にとっても自分のジャーナリストとしての原点を確認する機会になっています。これは我々教員も同じで、多くのことを学生から学んでいます。この意味では、人間の集いのなかの一員であることを実感しています。

学生時代に、「人間主義の経済学」とか「第三文明」という言葉を耳にしました。こうしたテーマを聞くと、資本主義と社会主義、あるいは自由主義と共産主義の対立を乗り越えた、本当に氣宇壮大な話だと思っていました。しかしながら、たぶん生きているあいだはズーと続くかと思っていた、資本主義と社会主義という枠組みは20世紀の終りに崩れてしまいました。こうした枠組みはせいぜい100年、200年といったスケールのものであったんですね。となると700年、800年というようなスケールで考えるものとなると、まさに雲をつかむような話になってしまいます。全く想像できないものになってしまいます。

そうしたスケールで考えるものは、人間と人間の間で切磋琢磨していくなかで構築していくものであるということになるのでしょうか。創立者はそのための種として創価大学をつくられたのであり、揺籃としてさまざまなことを試みる場として創価大学があるのではないのでしょうか。そうした何百年という長い時間と同時代との両方の位置付けから創価大学を見ていくべきであるということを、この「スコラ哲学と現代文明」という講演でいわれていると思います。

今回の講演では、創立者の講演をこのように読んだということ、話をさせていただきました。創立者の講演を読むためのたたき台にもならないものでしたが、多くの皆さまがそれぞれに考えていただくためのひとつの機会になれば幸いです。ご静聴ありがとうございました。

(本稿は、2003年5月30日の講演を加筆・訂正したものです。なお、創立者講演からの引用文のページは、創価大学学生自治会編『創立者の語らいⅠ』1995年によっています。)